

保育所実習の実態調査(2009)より —現代学生の主観主義の問題を探る—

桑原 逸美

Research regarding the Current State of Practical
Training in Nurseries in 2009 : Problems
of the Subjective Tendencies of Today's Students

Itsumi KUWABARA

2年続けている「保育所実習の実態調査」をもとに改善や成果を明らかにし、今後の授業でさらに追究すべき点をあげた。また今回は実習に行った一人の学生とその受け入れ先の責任者の評価表を並べて分析することにより、現代の学生の深刻な主観主義と、身についていない社会性のなさを、主にデヴィット・リースマンの『孤独な群衆』における他人指向型人間の切迫した不安の現れとし、彼が60余年前にアメリカの青年の現実としたものがついに現代日本の青年にそのまま当てはまることを示し、もはや小手先の職業的ノウハウの伝授ではどうにもならなくなっている事態を示した。

園からの総合所見には「職業としての保育」の視点からとらえた現代学生のプラス・マイナス面が列挙され、問題の困難さと、にもかかわらず大学教育に従事する者として諦めてはならないことをE・H・エリクソンの所説を手懸りに追究した。

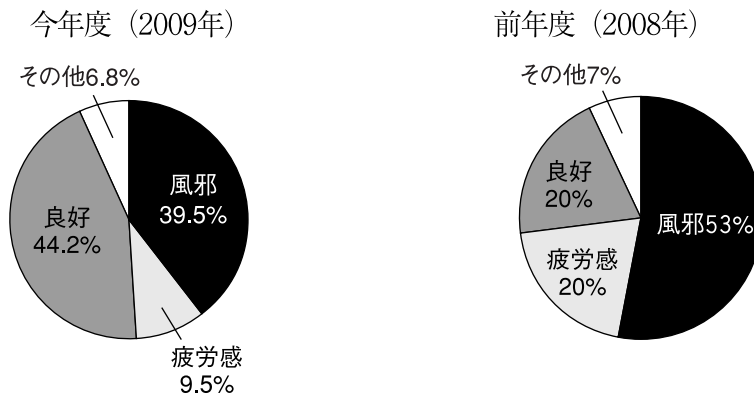
はじめに

物事の理解のための第一歩は、当の事柄がどうなっているのかを実際に知り、つかむことである。その原則に基づいて「保育」教育の最終的仕上げである「実習」の実態をアンケート調査という形で昨年手をつけ、その結果を紀要で報告したが、今回はその後の改善をめざした授業がどの程度の成果をあげたかを調べるために同じアンケートをとって前回と比較してみた。事態はかなり改善されたが、それとは別に実習における学生達の現実を知ろうと新しい切り口のアンケートをとったところ、若者達の主観主義と、保育という職業に生きる社会人との容易には埋めることができない溝があることに気づき、それをデヴィット・リースマンの『孤独な群衆』とE・H・エリクソンの『幼児期と社会』1, 2を採用して分析した。問題が社会的、歴史的、心理的領域へと拡大することになってしまったが、一つの問題提起として受けとめていただけたら幸いである。

1. 2009年「保育所・園の実習を終えて」のアンケート調査結果より抜粋

(対象…2年生保育士資格取得希望者148名)

(1) 健康状態はどうでしたか



その他の病気（インフルエンザ・溶連菌感染症・中耳炎・感染性胃腸炎・吐き気と腹痛・声が出なくなった）

(考察)

健康状態良好が前年比倍であったこと、疲労感はその半分だったことは、学生達がそれなりに健康に留意した結果であろう。ただし、「何らかの病気に罹った」が、ほとんど変わらなかったのは季節的なものと、朝から夕方までの緊張する環境に耐える力が不足しているものと考えられる。

(2) あなたは健康状態を保つためにどんな努力をしましたか

- ・手洗いうがいを心がけ、栄養もしっかり摂った
- ・朝、健康ドリンクを飲んだ
- ・給食は全部食べた
- ・沢山食べて沢山寝た
- ・夜、身体の温まる健康飲料を飲んだ
- ・インフルエンザの予防接種をした
- ・外出の時マスクをした
- ・マスクをして寝た
- ・冷えないようにホッカイロを貼った
- ・熱を出して記録簿を書けない時は無理をせず、早く寝るようにした
- ・記録簿を早く終わらせて、早く寝た
- ・点滴をしてもらった

- ・土・日に寝だめをするようにした
- ・家で自分の楽しい時間をつくるようにした

（３）その結果はどうでしたか。反省点・改善点もあれば書いてください

- ・体調を崩すことはなかったが、花粉症なので目のかゆみや鼻水が出てしまった
- ・風邪は熱も出ず、早く治った
- ・気をつけていたのに、風邪をひいた
- ・唇が乾いて大変だった。薬やリップクリームを用意すべきだった
- ・疲労感風邪につながることもわかった
- ・実習前から防寒対策をして、風邪を予防すべきだった。時期が遅かった

（考察）

対策については記録を早く終わらせてきちんと睡眠時間をとる、土・日の寝だめ、家で自分の楽しい時間をつくるなどは、休養とリラックスの面で優れた対処法である。反省点での「疲労感風邪につながる」はその裏返し表現で、このような体験から学生自ら注意しようとするのは、身につく知恵となるだろう。

（４）次の項目について、具体的にどんなことを心がけましたか。反省点はありますか
—実習態度—

①明るい挨拶

- ・朝や帰りは笑顔で元気よくするように心がけた
- ・相手より先に明るい挨拶をするようにした
- ・目を見て大きな声で挨拶をするよう心がけた
- ・先生、子ども、保護者など、会った人に挨拶をした
- ・帰る時の挨拶について、所長から指導をいただいた

②笑顔

- ・眠くて疲れていても、常に笑顔が保てるように心がけた
- ・部分実習・子どもと接する時以外でも笑顔を心がけた
- ・緊張し過ぎて笑顔が全然なかった
- ・たまに疲労感が顔に出てしまった

③先生方に対しての言葉遣い

- ・丁寧な言葉遣いを心がけた
- ・敬語や謙譲語を心がけた
- ・フレンドリーになり過ぎず、常に失礼はないか気をつけた

- ・緊張するときちなくなってしまったかもしれないが、努力した
- ・友達と話す口調になってしまったり、変な言葉遣いだった

④礼儀

- ・挨拶やお礼などしっかり言えた
- ・何でもさせていてほしいと思うようにしていた
- ・保護者の方々にも気を配った
- ・何か言われた時、きちんと返事をするように心がけた
- ・反省会で園長先生から「礼儀正しくてとても良い」と言ってもらった

⑤身だしなみ

- ・動きやすい服装、髪型にした
- ・清潔感のある身だしなみを心がけた
- ・華美にならないようにした
- ・靴を揃えておいたり、荷物もきちんと整理して置くようにした
- ・フード付きのものを着ないように言われたので、すぐに直した
- ・服の袖が長かった

⑥時間や規則

- ・ゆとりを持って園に着くよう心がけた
- ・30分前にはいつも行っていた
- ・10分前には保育室に入るようにした

⑦先生方との関係

- ・質問をしたり、笑顔で話すよう心がけた
- ・時間がある時は質問したり、話したりした
- ・積極的にやる事を聞いた
- ・先生に言われたことはきちんとこなした
- ・先生方が優しく、沢山質問ができ、わからない事は教えてくれた
- ・話をよく聞き、失礼な態度をとらないようにした
- ・体調を気遣ってくれた先生もいた
- ・積極的に会話できなかった

⑧学校への連絡

- ・病気になった時は、すぐに連絡をした
- ・病院に行ってから、診断結果をすぐに連絡した

（考察）

挨拶、言葉遣い、礼儀、身だしなみなどはすべて一般社会で生きていくために身につけるべき最低限のマナーであるが、成功、失敗を含めて学生達にはよい経験になったようだ。アンケートの文章からもその場の緊張感が感じとれる。百の説明よりも一つの経験で、その点からも実習の効果はあった。

—保育—

①子どもとの遊び

- ・すべての子とかかわり、自然に遊びに入っていくようにした
- ・子どもの目線になるように心がけた
- ・積極的に楽しく遊べた、遊びに参加しない子にも声をかけて誘った
- ・子どもからの誘いには応えて遊ぶようにしたが、全員には応えられなかった
- ・常に子どもが主体になるよう心がけた
- ・外遊びは見守りがちだったので、もっと一緒に遊べばよかった
- ・子どもの遊びを邪魔しないようにした
- ・危険がないように見守った
- ・もっとアクションを起こしてもいいと言われた
- ・色々な子と関わろうとしたが、特定の子ども達とだけ関わってしまった

②細かな観察

- ・全体を見ながら、細かいことに気を配った
- ・様々な面で、子どもの姿や保育者の関わり方を観察した
- ・子どもと遊びながら観察をした
- ・各年齢の発達の違いについて特によく観察した
- ・できた時とできない時があった

③積極的な態度

- ・自分から話しかけたり、質問したりして積極的に関わった
- ・部分実習（絵本・紙芝居・ピアノ）を「やらせていただけますか」と申し出た

④安全への意識

- ・注意していたが、室内用のすべり台から落ちるのを防げなかった
- ・常に注意していた
- ・意識が足りなかった
- ・遊びを見守り、全体的に目を向けるよう心がけた
- ・安全には気を配ったが、全部に気を配るのは難しかった

⑤子どもに対する言葉遣い

- ・荒くならないようにとても気をつけた
- ・丁寧な言葉遣いを心がけた
- ・たまに友達と話すような言葉遣いになってしまった
- ・わかり易い言葉遣いをするようにした
- ・「超」「やばい」等、気をつけた
- ・友達口調になってしまい、優しい口調ではなかった

(考察)

授業で常に「子どもが主役」と言い、また具体的に説明もしているのでかなりの程度うまくいったようだ。また観察については、個々の子どもと保育者の関わり方に注目するなど確かな視点から実習に臨んでいるようだ。

成功体験もいいが、失敗体験はもっと価値がある。子どもの事故を防げなかった、全体が見られなかった、時に友達と話すような言葉遣いになってしまった等は貴重な反省である。「超」「やばい」等気をつけたは率直で良い。

—学び—

①事前学習

- ・わからない事、保育所のルールを事前に聞いた
- ・次の日入る年齢の子ども達の発達を教科書等で確認をした
- ・手遊びや年齢の特長をプリント等で少し勉強をした
- ・実習記録に事前に学んだことを書いた
- ・部分実習の練習、アンパンマンの書き方を調べた
- ・授業のプリントをよく読んだ

②教材準備

- ・部分実習の準備をした
- ・ペープサート・絵本・エプロンシアター・紙芝居・軍手人形・折り紙シアターなど用意した
- ・一回絵本を借りるのを忘れたが、その後気をつけた
- ・前日までに紙芝居・絵本を何冊か読んでおいた
- ・ペープサート等、色々なものを用意すればよかった

③環境整備等の手伝い

- ・掃除など積極的に手伝った
- ・朝、園庭の石拾いをした

- ・ 一日の流れを把握し、見通しを持って進んで手伝った（掃除・給食配膳・机椅子の準備・玩具の整理・消毒等）
- ・ 先生の様子を見て手伝ったが、手伝う前に終わってしまったこともあったのもっと素早く動けばよかった
- ・ 少し引いてしまった

④先生への質問

- ・ その場で聞いたり，記録簿に書いたり，昼寝時や保育終了後に聞いた
- ・ 解らないことや，次に行なう活動について積極的に聞くようにした
- ・ 先生から「質問ない？」と聞いてくれたので質問し易かった

⑤先生からの指導

- ・ 素直に受け止め，次に生かすようにした
- ・ 真面目に聞き，忘れないようにメモした
- ・ 疑問や記録簿について細かく，時には厳しく指導してもらった
- ・ 言われたことを次に生かすことができなかった，意識が足りなかった

⑥部分実習

- ・ ゲーム・ピアノ・絵本・紙芝居・手遊びを行なった
- ・ 各クラス一回はやらせてもらった，何回もやらせてもらえばよかった
- ・ 流れ，準備，導入等を先生に指導してもらったのでよくできた
- ・ 導入が難しかったし，年齢に合っていないような時があった
- ・ 壁面装飾「桜」を作った
- ・ ピリピリしてしまい，笑顔がなかった

⑦指導案

- ・ 子どもの予想される姿を大まかに書いてしまったので，予想外のことが多々起きて戸惑った
- ・ 配られたプリントを参考にして各年齢に合うように書いた
- ・ できるだけイメージしながら作成した。前々日提出し，指導をいただいた
- ・ 全く書かなかった

⑧反省

- ・ 反省することで一日を振り返ることができた

(考察)

事前学習や教材準備などはよくできたようだ。「アンパンマンの書き方を調べた」などほほえましい。「前日までに紙芝居，絵本を何冊か読んでおいた」や「朝，園庭の石拾いなどをした」も貴重な経験である。また「先生の迷惑にならない時間に質問した」

もすべての学生が共有できるよい配慮である。

指導案について「子どもの予想される姿を大まかに書いてしまったので、予想外のことが多々起こった」も経験として価値がある。現場とはまさに予想外の出来事が連続的に起こるところで、それに対する全方位的対応への身構えが大切だからだ。また「反省することで一日を振り返れた」も貴重な体験である。職に就いてからもその習慣を身につけていれば、日々の蓄積によって大きく飛躍できるからである。

—実習記録—

①毎日の提出

- ・できた
- ・体調がすぐれず何度か遅れたが、先生に事情を説明した
- ・できなかった

②丁寧な記入

- ・読みやすい字で丁寧に書くようにした
- ・丁寧に細かく書くようにした
- ・漢字が少なかったので気をつけるようにした
- ・途中から汚くなった、眠くなってぐちゃぐちゃになってしまった

③誤字・脱字

- ・前半は数か所あったが、後半は何度か読み返すようにした
- ・時々先生から指摘され、直した
- ・辞書で調べたりして、誤字・脱字のないように心がけた
- ・見直しを怠ったことが何回かあった

④ねらいと考察

- ・年齢に合ったねらいと考察ができた
- ・前の日に考えて次の日に生かすようにした
- ・ねらいに即して実習ができた
- ・前日の反省点をねらいにした
- ・毎日考えるのが少し大変だった
- ・ねらいを立てるのが難しかった
- ・文章があまりまとまっていなかったなので、本を読もうと思う

(考察)

実習記録については反省点が特によい。「途中眠くなってグチャグチャになってしまった」「文章があまりまとまっていなかったなので本を読もうと思う」などはいかにも学生の生の反省で好感が持てる。誤字は自分ではなかなか気づけないものなので、基本的

な漢字については年間計画の中で根気よく教える必要があると思う。

（4）感動したこと（考察のみ）

恐らく実習のハイライトであろう。保育の概略は授業で学んではいても、いざ現場で生きている子ども達の成長のプロセスをたとえ3週間でも見て、感じて、驚いているのがじかに伝わってくる。学生が子どもを思いやるよりも、その逆に子どもが学生を思いやっている様子がうかがえる。赤の他人同士、そして年齢も性別も違う人間同士が心を開いて良好な人間関係を作るその一方の当事者となった感動と驚きと充実感とは貴重である。

「ピアノが下手だったのに『先生上手だねえ』と言ってくれた」は実習生を勇気づけようという配慮からで、子どもの方が一枚上手である。

（5）学んだこと（考察のみ）

多岐にわたっているが一つ一つが貴重である。総じて「個々人の違い」に気づいて、それへの対応も個々に考えなければならないことを学んでいる。「家庭状況を考えながら保育する」「信頼関係の大切さ」「先生によって指導やクラスの雰囲気が違う」「体調が悪い時もいつもと同じように接する」「子ども達の中にルールや約束があるので簡単に入れてもらえなかった」等は特に鋭い観察と理解を示している。

（6）困ったこと（考察のみ）

要するに現場での個々の出来事に対応するノウハウがなかったので、対処の仕様がなかったということであるが、これも貴重な経験である。3週間でその対処法を身につけることなど不可能なのであるから、現場では多種多様な「事件」に対処しなければならないのだとわかってだけで十分な成果である。「ゴキブリが出た」「眠くて寝そうになった」は学生気分がストレートに表現されていて面白い。

（7）今後の課題（考察のみ）

これらのアンケートをもとに、授業で学生達に改善すべき個々の問題点を指摘し、それらを身につけさせることは重要である。ただし、その手法だけではきりがないと思う。もっと根源的な問題（子供とは何か？人間とは？社会とは？職業とは？）という問いを彼らに提起し、学生達に自らの幼児期を甦らせ、その中で大人にどうされた結果よかったとか、傷ついたといったことを思い出させ、常に自分を幼児の立場に置きつつ一人前の大人の保育士として対応するにはどうしたらよいかを考えさせる必要があるだろう。

2. 自己評価と実習園の評価

(1) 自己評価と実習園の評価 (事例)

以下の二枚の評価票は一人の学生自身の自己評価票と、受け入れ先の責任者がつけてくださった当の学生の評価票である。

保 育 実 習 自 己 評 価 票

組・学籍番号		実習保育所(園)名	平成 年 月 日		
氏名 ○ ○ ○ ○	T 市 公立 私立 ○ ○ C 保育所(園)	実 習 期 間	自平成 年 月 日 至平成 年 月 日		
評 価 項 目		できた	ふつう	できない	
実 習 態 度	①身体の健康に留意し、良い状態を保てたか		○		
	②心の健康に留意し、明るく笑顔を絶やさず過ごせたか	○			
	③実習生としてふさわしい服装、髪型であったか	○			
	④時間や規律を守り、真面目に一生懸命やったか	○			
	⑤先生方に対して適切な言葉遣いや礼儀正しくできたか	○			
	⑥与えられた職務に責任をもって最後まで取り組めたか	○			
	⑦実習先にとけ込み、協調して職務を行えたか	○			
	⑧必要に応じて園や学校への連絡を忘れずに行ったか	○			
保 育 の 能 力	①子ども達の世話を愛情を持って積極的行えたか	○			
	②進んで遊びの中に入り子ども達と仲良しになれたか	○			
	③子ども達にはわかりやすい言葉ではっきりと話しかけたか	○			
	④子どもの自主的な活動を妨げることなくかかわれたか	○			
	⑤子ども達の要求や言おうとすることに真剣に耳を傾け、 誠実な態度で接することができたか	○			
	⑥子ども達の安全に気を配り、機敏に行動できたか	○			
学 ぶ 態 度	①実習クラスの子についての事前学習を行ったか	○			
	②保育士の教材準備、環境整備の手伝いを積極的行ったか	○			
	③わからない事は質問し、何事にも前向きに取り組めたか	○			
	④指導を受けた点を理解し、すぐに改善できたか		○		
	⑤部分実習を積極的にやらせてもらったか	○			
	⑥指導案の作成や環境設定をしっかりと行えたか	○			
	⑦実習終了後の反省を十分行ったか	○			
記 録 簿	①記録簿は毎日書き、園に提出したか	○			
	②丁寧に読みやすく、誤字、脱字に気をつけて書けたか		○		
	③毎日適切なねらいを定め、しっかりと考察を行ったか		○		
実 習 す べ き 日 数					
出席日数 14 日	病 欠: 2 日	遅 刻: 日			風邪〔気管炎〕
欠席日数 2 日	自己欠: 日	早 退: 日			

保 育 所 実 習 評 価 票

平成 20 年度

千葉敬愛短期大学

実習生氏名	○ ○ ○ ○	実習保育所名	○○○保育所
組・学籍番号	○○○○○○○	実習指導者名	○ ○ ○ ○
評 価 内 容		評 価	
実 習 態 度		<div> <div>やや</div> <div>優れている</div> <div>優れている</div> <div>普通</div> <div>やや劣る</div> <div>劣る</div> </div>	
1. 実習の目的や課題の自覚		<div> <div></div> <div></div> <div></div> <div></div> <div>○</div> <div></div> </div>	
2. 保育の仕事への責任感		<div> <div></div> <div></div> <div></div> <div></div> <div>○</div> <div></div> </div>	
3. 保育者との協調・協力姿勢		<div> <div></div> <div></div> <div></div> <div></div> <div>○</div> <div></div> </div>	
4. 挨拶・言葉遣い		<div> <div></div> <div></div> <div>○</div> <div></div> <div></div> <div></div> </div>	
5. 服装・身なり		<div> <div></div> <div></div> <div>○</div> <div></div> <div></div> <div></div> </div>	
保 育 の 能 力		<div> <div>やや</div> <div>優れている</div> <div>優れている</div> <div>普通</div> <div>やや劣る</div> <div>劣る</div> </div>	
1. 子どもの実態把握・理解		<div> <div></div> <div></div> <div></div> <div></div> <div>○</div> <div></div> </div>	
2. 子どもへのかかわり		<div> <div></div> <div></div> <div>○</div> <div></div> <div></div> <div></div> </div>	
3. 助言の受け入れとその活用		<div> <div></div> <div></div> <div></div> <div></div> <div>○</div> <div></div> </div>	
4. 子どもの健康・安全への配慮		<div> <div></div> <div></div> <div></div> <div></div> <div>○</div> <div></div> </div>	
5. 実習日誌等の記録		<div> <div></div> <div></div> <div></div> <div></div> <div>○</div> <div></div> </div>	
総 合 評 価		<div> <div>やや</div> <div>優れている</div> <div>優れている</div> <div>普通</div> <div>やや劣る</div> <div>劣る</div> </div> <div> <div></div> <div></div> <div></div> <div></div> <div>○</div> <div></div> </div>	
<p>総合所見（保育者としての適性、今後の努力点などを自由にお書きください）</p> <p>実習に入る心構えとして、実習の意義を十分に理解することが必要だったと思います。</p> <p>今回の実習では実社会の厳しさを実感したのではないのでしょうか？</p> <p>子どもの発達を保育士の視点でとらえ、気付いた事、感じた事を実習録に記入できるとより充実した実習録になったと思います。文章の書き方も口語体での記述がところどころに見られ気になりました。</p> <p>常に自分の行動を振り返り反省することの大切さ、指導・助言された事を受け入れる謙虚さそれらを自分のものとして積極的にいかせる様になる とよいです。</p>			

平成 21 年 3 月 3 日

○ ○ ○

保育所(園)長名

○ ○ ○ ○

印

すでに記したように載せた二枚の評価票は一人の学生の自己評価票と、当の実習園の責任者が観察した評価票である。この劇的な食い違い、ほとんど正反対の評価は、多かれ少なかれ他学生の評価にも見られるものなので、その象徴として載せたものである。

学生の自己評価から見ていくと、例えばほとんどが5段階評価に直すなら5である。24項目あるうちの4項目がいわば「ふつう」の3であるが、気管支炎で2日休んだので「身体の健康に留意し、良い状態を保てたか」はふつうにしたのであろう。客観的に言えば、これは1の「できなかった」に○をつけるべきであろう。あとは指導による改善

ができなかったと、反省が不十分、誤字、毎日のねらいと考察については園から直接指摘されたので「ふつう」にしたのであろう。

園側の評価票を見ると、項目のほとんどが「やや劣る」で、5段階の2である。総合評価も2であるように、保育士として欠かすことのできない能力をほとんど身につけていないと断定されているようなものである。人が人を評価するというのはただでさえ難しいものであるし、どうしても評価する人間の主観や価値観と無縁ではあり得ないのであるから、あまり厳密に考えるのは危険であるが、しかし、長年保育の現場で責任を果たしてきた方の目に映る学生の評価は客観的な重みを持つと考えるべきであらう。

そうであるなら当の学生の内面にある主観的な評価基準が問題であらう。もっともそういうこと自体すでに矛盾しているのである。むしろ彼らは評価基準を持っていない、自分の勘で評価しているとしか考えられないのである。つまりは自分自身の行動を測定する基準を彼らは身につけてはいないのである。これは信じ難いことであるが、日常的に彼らと接している経験からすると、彼らの物事の評価基準は自分が好きか嫌いかわかる。

つまり幼児期の評価基準が、肉体の成長とともに更新されていないのである。外見的成長と内面の状況は年とともに隔たっていく。しかし、他人、大人、社会は外見に従って彼らの内面を推理するから、まさか外見が20歳の若者の内面が3、4歳の価値基準に従って営まれているとは想像もできないのである。しかも彼らは生まれたときから「他人指向型社会」に生きている。

(2) 実習園からの総合所見

〔実習態度〕

1 実習の目的や課題の自覚

- ・ 実習意義・目的・課題をよく理解していない
- ・ 実社会の厳しさが理解できたのではない。甘くみている
- ・ 常に自分の行動を反省し、指導を謙虚に受け入れ、自分のものとして積極的に生かす
- ・ 社会人としての態度、人との接し方、目配り、気配りが行き届いている
- ・ 保育園の方針をよく理解している
- ・ 保育者の在り方、保育園の役割をよく理解していた
- ・ 話を聞く態度、姿勢に特に好感がもて、目的や課題意識もある

2 保育の仕事への責任感

- ・ 健康管理の不十分さがある。病気における適切な処置、園への報告など学んでほしい

- ・休んだ次の日は、自分から迷惑をかけたことを保育者に話す
- ・人的環境としての保育者の人間性が子どもに与える影響を自覚してほしい
- ・毎日、早朝から出勤し、意欲が見られた
- ・一生懸命さが伝わってきた

3 保育者との協調・協力姿勢

- ・社会のルール、はじめ、指示を仰ぐことなど身についていない
- ・目立たないような仕事を進んでやり、手が足りないことに気づいた時は確認し、行動することが身についている
- ・進んで手助けをしてくれた
- ・雑用を積極的に手伝っていた。「～しましょうか？」とか、保育士が箸ではいていると、チリトリを持ってくるなど、初めての実習だとは思えなかった

4 挨拶・言葉遣い

- ・明るさに欠け消極的、挨拶は本人がしていると言っていたが、相手に聞こえなかったりすることもあるので、助言された時、素直に「はい」と返事ができるように
- ・緊張していたのか挨拶ができない
- ・初日にマフラーを巻いたまま挨拶したので注意した
- ・保育者や子どもに対して言葉遣いが悪い
- ・子どもに対する言葉遣いや態度に、日頃の言動がそのまま出ている「～じゃん」「～かも」など
- ・明るく礼儀正しさに好感が持てた
- ・さわやかな笑顔で明るく挨拶をしており、とても感じよい
- ・毎朝、事務室に挨拶に来るときの笑顔に、今日一日子ども達と楽しむぞという感じが出ていた
- ・オリエンテーションに来たとき、受け答えがとてもしっかりしていた
- ・子どもの話を聞いて、丁寧に返していた

5 服装・身なり

- ・髪の毛を長いままにしていた
- ・身だしなみや挨拶が身についている

〔保育の能力〕

1 子どもの実態把握・理解

- ・発達をふまえながら保育者と子どもの関わりを読み取ることが難しかった。
発達をしっかりと理解するように
- ・子どもの心を感じようとする姿勢が伝わってこない
- ・子どもの名前を覚えないため呼ぶことができない

2 子どもへのかかわり

- ・手遊び・絵本・紙芝居は沢山練習する
- ・遊びの場面で声かけのタイミングや声の大きさを工夫する
- ・子どもの前であぐらをかいていた
- ・指導しなくてはという気持ちが働いてしまったのか、誘導や指示の言葉が多かった
- ・不安そうな表情で積極的な触れ合いがなかった
- ・オリエンテーション時に、失敗を恐れず子どもの中に入るように話したが生かされなかった
- ・表情がこわばっていて、柔らかさがない。心の柔軟体操をし、感性をみがく
- ・自分から遊んで欲しいと言えない子に気づき、積極的に関わりをもっていた
- ・優しくおだやかな雰囲気がよかった
- ・優しくほっとするような笑顔だった
- ・一人ひとりの子どもに目を向けて声をかけるなど、大分努力していた
- ・笑顔で声が大きくはつらつとしていて積極的
- ・子どもに丁寧にかかわっていた
- ・子ども達と元気に走り回って遊んでいる姿がよかった
- ・明るく熱心であり、子どもの中に溶け込んでいる。天性のものをを感じる
- ・人見知りの時期なのに泣く子がいなかった
- ・手作り絵本を見せていた

3 助言の受け入れとその活用

- ・質問が少なかった。何でも聞く努力をすること
- ・指導を謙虚に受け入れ、自分のものとして生かすことが大切である
- ・部分実習の指導案は当日ではなく早目に提出する
- ・部分実習では事前に担当保育士へ相談や確認に行っていた（意欲的）
- ・真面目な態度で指導・助言を素直に聞き入れ、実行に移していた

4 実習日誌等の記録

- ・日誌の提出は基本である。未完成のまま提出し、繰り返し指導された。実行できない。実習を軽く考えている
- ・記録の仕方一つ一つ、指導をしなければならなかった
- ・誤字が多い。細かく丁寧に書く
- ・書いたことと行動が一致していない
- ・日々どんな点に視点を置いて観察するのか、目標を持ち、それに沿った記録をするように助言したが伝わらなかった
- ・書き方が話し言葉になっていた
- ・細かく書けていたが、ポイントをとらえて要点をまとめて記入するとよい
- ・色々なおもちゃの名前や遊び方など、絵を描く等工夫して書かれていて、とてもよかった
- ・字がきれいですばらしい

5 その他

- ・卒園児ということで甘えが出ていた
- ・卒園児の慣れなのか、日々の成長がみられない
- ・ピアノがまったく駄目なので、もっと練習するように
- ・忘れ物がある
- ・卒園児が立派に成長し、この園を選んだのは嬉しい
- ・高校のボランティアやインターシップに参加していたので、速く一日の流れを把握し動いていた
- ・オーラが出ているように見えた。大変この仕事に向いている
- ・すぐに雇用したいくらいである
- ・保育士だけではなく、他の職種の人「今回の実習生はいいね」と言っていた
- ・オリエンテーション時の電話では、きちんとした言葉遣いができなかったのが心配したが、実習は大丈夫だった
- ・初めての实習では上出来、出しゃばる訳ではなく、早・遅番も嫌がらない。ずっといるようで違和感がない
- ・少食とのことで給食の量を少なくした
- ・環境構成欄は本人が行ったことを書くのか、担任が行ったことを書くのか？

(考察)

実習園からいただいた総合所見はすべて極めて貴重なものである。それは今後の教育に生かせるという実践的価値があるからというばかりではなく、現代の若者が実社会に入った場合どういうことになるのかの緊迫感に満ちた報告でもあるからである。それはまた私達教員にとっても貴重である。なぜなら、私達が学生と接するのは当然学内であり、授業中である。時に質問や就職の面接時期には不安を消すために研究室にやってきて「面接の練習をお願いします」などと言うので、彼らの内面や表現や振舞い方についてある程度理解はできるが、それでも学生と教員ではあってもそこに「職業」あるいは「仕事」は介在しない。つまり、彼らに職業または仕事のための様々な準備や知識やノウハウを与えていながら、それが現実の「仕事」の中でどのような展開を見せ、結果を生むかは具体的にはわからないのである。

しかし、実習園の責任者の方は厳密に「仕事としての保育」という視点から容赦なく人的素材としての学生達を観察されている。ここでも当然お互いの気質が合う合わないということはあるだろうが、長年現場で実習生を受け入れてきた立場の私から見ても、一つ一つの指摘が納得できるのである。もしこれらの所見のすべてをうまく組み合わせることができれば、そこには現代の若者の像が立体的に鮮明に立ち現れることであろう。ここではプラス面にマーカーを引き、マイナス面はそのままにしておいたが、すべてが納得できるものである。苦しんだ当の学生達にはかわいそうであるが、今後の後輩達への教育に大いに役に立つ。

3. E・T・エリクソンとデヴィット・リースマンから学ぶ

実習園からの深刻な個々の指摘を前提しつつ、まず現代の学生がどういう立場に置かれているかをエリクソンの『幼児期と社会』の記述で見てみよう。

「人生にはまず学校生活がある。その学校は野原であったり、ジャングルであったり、或は教室であったりするが。子どもは過去の希望や願望を忘れなければならない。同時に彼の豊かな想像力は精彩を欠くようになり、非人間的なものの法則に拘束される。読み、書き、算数にさえ利用されるのである。なぜならば、子どもは心理的にはすでに人の親になるべき初歩的な歩みを始めていても、生物学的にはまだ親にはなれない。しかしそうなる前に、彼はまず働く人になり、将来の供給者になる準備をしなければならない。」(1)

学生は社会で職を得ようとする場合「過去の希望や願望を忘れなければならない」であろう。しかも「心理的にはすでに親になるべき初歩的な歩みを始めていても親にはなれない」は、心理的には保育士になるべく実習に出かけているが、その能力はまだないというのと同じである。

エリクソンは青年について次のようにも書いている。

「青年の心は本質的に猶予期間の心理である。児童期と成年期の中間にあり、子どもとして学んだ道徳と大人によって発展されるべき倫理の中間にある心理社会的段階である。それは観念論的心性である。」（2）

さて、エリクソンの「青年」の置かれた状況についての二つの定義をもとにして所見を読むと、どの指摘も含蓄のあるものである。

「実社会の厳しさが理解できたのではないか。甘く見ている」や「社会のルール、はじめ、指示を仰ぐことなど身についていない」や、「自分では挨拶したと言っていたが相手に聞こえなかった」「初日にマフラーを巻いたまま挨拶した」「子どもの前であぐらをかいていた」などは、同い年の仲間の中で20年を生きてきた結果そのものの表現であろう。つまり、彼らの心の中に、自分とそれを取り巻く同年代の男女から成る世界はあっても、それ以外の社会や国家や世間、あるいは大人達は存在しないも同然なのである。挨拶も相手に伝えるための信号であるから、相手に聞こえない挨拶は挨拶ではない。にもかかわらず本人は挨拶をしたという完全な主観主義を事実として主張したのである。

非常に重要な指摘と思うのは「人的環境としての保育者の人間性が子どもに与える影響を自覚してほしい」である。これは幼児教育の理論と実践を伝授するだけではどうにもならないものであるが、しかし、この「人間性」を育てることは幼児への感化という点で最も重要なものである。

もっともプラス面も多く記されている。「明るく礼儀正しい」「目立たない仕事を進んでやる」「毎日、意欲的」「保育者のあり方、保育園の役割をよく理解していた」「自分から遊んでほしいと言えない子に気づき、積極的に関わりをもっていた」「優しくおだやかな雰囲気よかった」「助言も素直に聞き入れ、実行に移していた」「オーラが出ているように見えた。大変この仕事に向いている」などは学生達にも積極的に紹介し、勇気づけたいと思う。しかし、これらも一人一人の人間性の表出であって、彼らの身についていた能力であろう。私達のできることは「社会」の生の声をできるだけ多く彼らに伝え、プラス面を身につけ、のばし、マイナス面を改めるよう助言することであろう。

リースマン『孤独な群衆』に定義されている他人指向型人間とは「個人の方向づけを決定するのが同時代人であるということだ。この同時代人は、かれの直接の知り合いであることもあろうし、また友人やマス・メディアをつうじて間接的に知っている人物であってもかまわない。同時代人を人生の指導原理にするということは幼児期からうえつけられているから、その意味ではこの原理は『内面化』されている。他人指向型の人間がめざす目標は同時代のみちびくがままにかわる。かれの生涯をつうじてかわらないの

はこうした努力のプロセスそのものと、他者からの信号にたえず細心の注意を払うというプロセスである。」（3）

自らの力で外界の未知なるものや困難に取り組んで自分の内面を拡大・深化させようとはしない。仮に友人から価値基準を学ぶとしてもその友人の価値基準なるものがマス・メディアによって伝えられるもの（テレビ、雑誌など）であるなら、結局彼らはマス・メディアの動向に細心の注意を払いつつ、流行となったファッション、化粧、言葉遣い、立ち居振舞い、価値観に自分を合わせることに必死になる。

彼ら若者はのほほんと20年を学生という恵まれた身分の中で空費してきたのではない。彼らは不安でたまらないのである。孤独を極度に恐れているがゆえに、年中友人とメールをし合っているが、相手の返信メールが10分20分と遅れると、その人間に自分は見捨てられたのではないかとあれこれ邪推し、最悪のシナリオを思い描く。私が実際に他大学の学生から聞いた話では、六人でグループを作っている学生の一人がゼミを選ぶ際「六人一緒に同じゼミに入ろうよ」と言い出したのでさすがに驚いたという。一人になることを極度に恐れるその女子学生は、学問への興味よりも「六人一緒」を優先させてゼミを選ぼうというのである。

だからといって友人間の絆や理解が昔の学生よりも強まっているわけではない。彼らはひたすら孤立を恐れるが、同時に自分の内面に他人が入ってくるのも恐れている。これも学生からじかに聞いた話であるが、自分の内面に他人が入ってきてほしくないのに、他人の内面に少しでも入りこんでいると思われるような質問はしない、それ続けていると身近な友人が何を感じ、何を考えているのかもわからなくなるというのである。そこで彼らはまた、生きるためのノウハウをマスコミに求める。

リースマンは1937年発行の本について触れている。

「人を鼓舞激励するような書物はだんだんと社会的、経済的な移動性を取り扱わないようになってきた。1937年には、デイル・カーネギーの『いかにして友だちを作り、人びとに影響を与えるか』という本が発行された。この本は自己操作を奨励する本であり、しかもその自己操作の目的とするところは、たんにビジネスの世界での成功というだけではなく、たとえば、人気者になるといったような仕事以外の場所での目標を含んでいたのである。1948年には同じカーネギーによる『いかにして心配をとりのぞき、人生を生きるべきか』という本が発行された。前著からこの著書への変化は不況時代から完全雇用の時代への変化によるものかもしれないが、必らずしもそれだけではない。1948年に出たこの本の中では自己操作はもはや、なんらかの社会的な遂行に向けてのものではなく、個人が自分の運命と社会的状況に独自の適応していくためのものとして考えられるようになっているのである。」（4）

リースマンが分析しているベストセラー本は今から6,70年も前のアメリカで出版されたものである。しかし、これはまさに現在の日本の出版物と言ってもよいものである。つまり6,70年前のアメリカのように他人指向型人間で埋め尽くされた感のある日本社会で、生の不安を消し去るための人生本が続々と出版され、若者達ばかりか大人達もそれを買って読んでいるのである。「いかにして友だちを作るか」は現代日本の若者の心の琴線に触れるであろう。

しかし、リースマンが言うようにそれは「社会的な遂行」に向けた自己操作を含まないのであるから、現実における職業への適応には無関係なのである。

園の責任者の方の評価票は当然のことながら現場の職業の専門家の目でとらえられたものである。現実には生きている子どもの心を正確にとらえ、安全に細心の注意を払いながら彼らを一定の方向に自然に動かし、成長のための助力をするという明確な目標が設定されており、学生がそれをどこまで達成したかという視点でとらえられている。

学生も授業で子どもの成長については理論的に学び、授乳や沐浴、おむつ交換などについても精巧な人形を使って実地に研修もして実習に臨んでいる。確かに現実の体験がまるでないところに突然入り込んで2週間の職業体験をこなすというのは大変なことで、成功、失敗を含めて現実を知り、自分の問題点をつかむために実習があるのだが、現代の若者達は全体的に現代社会の動きになんとか適応しようと必死になってはいるが、社会的、職業的な目的遂行のために自分を教育し、そのノウハウを身につけ、現実を動かす総合的な能力を高めようという準備と心構えが不足していると言えるであろう。

リースマンは他人指向型の青年達について次のように書く。

「かれらは大事業を成し遂げるということよりはむしろ社会保障のたぐいを求める。かれら是有名になることは求めない。むしろ、人から認められることを求める。かれらは自分の才能をのばすことによって、めんどろな状況の中におちいるのではないかと考える。…内部指向的な中産階級の男の子は20歳を過ぎてから適応することを学ばなければならなかった。つまり20歳になってから子ども時代から持ちつづけていた夢を捨てて、ひかえめな大人のやり方を受け入れなければならなかったのである。ところが、これと対照的に他人指向的な男の子は、そもそもそのような夢を持つことがないのだ。かれはもの心ついて以来、集団に同調することを学びつづけてきているから、思春期になって、自分の家庭の世界と自分の同世代人の世界とのどちらを選ぶべきかというような問題状況には直面しないし、また自分の夢と現実世界とのどちらを選ぶべきかというような問題状況にも直面しないものなのだ。…他人指向的な人間は『栄光』よりはむしろ『愛情』を選ぶ。トックヴィルが見たように、あるいは予見したように『かれは夢に見たこともないような遠大な事業に身をゆだねようとはせずに、むしろ、小さな望みを持つことで満足しているのである。』」（5）

一般の会社においても新入社員の定着率は極めて低いと言われている。仕事について上司がちょっと注意するだけで簡単に辞めてしまうとも言われている。これは現代の青年達の心の中における「人生の中の職業」の位置がはっきりと定まっておらず、職業が自分の人生を保障するものであるとわかってはいても、それは単に頭でわかっているのであって、自分の中の価値基準である好きか嫌いかに従って、上司は「嫌い」と判定され、その忠告は自分への「いじめ」であると感じとれば、それは彼や彼女にとって最大のストレスとなり、その忠告を良薬として役立て、自分の能力を高めるよう努力しようという方向を選ぶより、すぐその会社を辞めてストレスの原因から一刻も早く逃れたいということになるであろう。時代や若者の気質が変わろうとも、「仕事」自体は変わらないものである。成年に達した者達は自分の好みや適性に従って「仕事」を選び、その全体にうまく適応し、将来の「家庭」を作り支える準備をしなければならない。「保育士の仕事」もまたその中の一つである。

ここに取り上げた一対の評価票はいわば「新入社員」と「上司」の、経験と立場と職業自体を自分のものにした者と、将来の漠然とした職業についての夢しか持っていない者との鮮やかな対照を見せてくれるものである。

学生を教える立場の者としては、問題を個人の適性或性格にのみ帰するのではなく、また自覚的な反省や努力への助力を心がけるだけではなく、リースマンの言う「他人指向型人間」としての学生像をも頭に入れて、今後どういう対策を打ち立てるべきかを考える必要がある。

おわりに

2年続けた実習に関するアンケート調査によって健康や学習態度、礼儀、身だしなみ、先生方との関係、あるいは保育そのもの、実習記録などの面でかなりの改善が見られた。反省点も素直に具体的に書かれていて、次に続く後輩達にも大いに役立つと思う。よかった点はほめ、改善点については具体的に指摘し、来年はさらにより状態を生み出そうと思う。

また、今回は少し刺激的であるが、実習に行った一人の学生と、それを受け入れてくれた実習園の責任者のほとんど正反対と言える評価票を並べた。それについてはエリクソンとリースマンを採用して分析したので触れないが、「実習園からの総合所見」の中で様々に記されているように、現実の学生達の内部状況はかなり深刻である。それは大きく言えば「現代日本における青年問題」と言うべきもので、とても私一人の手には負えないものであるが、しかし、このような実態調査を謙虚に受け止め、自分の授業でできる限りの努力をして、学生達の将来の確かな幸福のためにいささかなりとも手助けで

きればと改めて思った。最後にエリクソンの青年論を共感を持って記し、この稿を閉じようと思う。

「アメリカの若者たちは、一般に認められている彼らの役割、正確に言えば、アメリカの青年期という容赦のない標準化によって押しつけられた役割に困惑し、様々な形で誰も彼も逃避しようとする。退学する、仕事をやめる、夜、家へ帰らない、奇異な、人を寄せつけない気分に関心する。一旦『非行』に走った場合、彼がもっとも必要とし、またしばしば彼にとって唯一の救いとなることは、年上の青年や助言者や裁判官たちが、青年期特有のきわめて動的な状態を無視した都合のいい診断や社会的判断に従って、彼をさらに類型化することをやめてくれることである。」（6）

引用文献

- | | | |
|-----|---------------------------|---------|
| (1) | E・H・エリクソン『幼児期と社会』1（みすず書房） | P 3 3 2 |
| (2) | 〃 | P 3 3 8 |
| (3) | デヴィット・リースマン『孤独な群衆』（みすず書房） | P 1 7 |
| (4) | 〃 | P 1 3 6 |
| (5) | 〃 | P 2 1 8 |
| (6) | E・T・エリクソン『幼児期と社会』2（みすず書房） | P 4 9 |